

ロシア・カザークと遊牧民

中 村 仁 志

はじめに

ロシアにおけるカザークの歴史について考察するにあたり重要な問題となるのが、カザークと彼らの隣人であった遊牧民との関係である。カザークが暮らしたロシアの南部辺境は、遊牧民が生活の場としてきたステップ地域とひとつながりの空間をなしており、カザークは成立以来、遊牧民と密接な関係を持ちながら、その歴史をつむいできたのである。

ロシアの南部辺境のなかでステップにあたる地域は、大別すると黒海の北岸とカスピ海の北岸にわかたれる。このうち黒海の北岸は、キプチャク汗国が解体した後は、クリミア半島に拠るクリミア汗国が支配するようになる。トルコ＝オスマン朝のスルタンの宗主下にあったクリミア汗国のタタール人は、16世紀以降ロシアと敵対関係にあり、しばしばロシアの中央部へと略奪遠征をしかけてきた。このためロシアの黒海北岸勢力＝クリミア汗国に対する政策は、まず防衛線の構築、ついで段階的に南進をすすめ、そして最終的に18世紀後半にいたって併合という過程をへた。その間、南方のカザーク、とくにドン・カザークはほぼ一貫してロシアの君主たるツァーリの命に従いつつ、クリミアのタタール人勢力と対峙した。

これに対し、カスピ海北岸では、ステップの主人公たる遊牧勢力の顔ぶれがつぎつぎと入れ替わるのを特徴としていた。カスピ海北岸のステップは、古来アジアから西進してきた遊牧勢力が家畜を養う牧草地としての役割をはたしていた。事情はヤイク・カザークが当該地方に住みなした16世紀以降にあって

も大きくは変わらない。ノガイ・タタール人(テュルク系)、カルムイク人(モンゴル系)カザーフ人(テュルク系)などがカスピ海北岸のステップで遊牧生活を営んだ。これら遊牧諸勢力は、時々の事情、自身の利害にしたがってロシア国家を相手にして時に敵対、時に友好ないし同盟と呼ぶべき関係を結んだが、それは辺境の情勢をはなはだ起伏にとんだものにした。このため遊牧民の隣人であったドン・カザークやヤイク・カザークの歴史も、遊牧勢力の動きと密接にからみあいながら展開していくこととなる。

本稿では、カスピ海北岸を地域的な枠組みに設定し、ロシア国家との関係を軸にカザークと辺境の遊牧民との関係を整理しつつ、あわせてロシア史におけるカザークの役割、とりわけ逃亡者の受け入れ先、社会的避難所としてカザーク地域がもった意味について考察していく。

1 ノガイとカザーク

ロシアの南方には、カスピ海、アゾフ海、黒海などの北岸に注ぎ込む、いく筋もの大河が流れている。それらのなかで、カスピ海の北岸へと流れ込んでいるのは、西方ではロシアの中央部を貫流した後、南下してカスピ海にいたるヴォルガ河、東方においてはウラル山脈に端を発するヤイク河(現在のウラル河)である。両大河のうちロシアの人々から親しみを込めて「母なるヴォルガ」と呼ばれたヴォルガ河は、実のところ、その中下流地域にかんしては、長きにわたって遊牧民の勢力下にありロシア人の手の届かない世界であった。とくに13世紀以降、バトゥの遠征を契機としてジョチ・ウルスを大きく西方へと拡大してキプチャク汗国を建てたモンゴル人は、ヴォルガ河の下流に首都として新旧のサライをかまえ、ここを拠点にして北方のロシアの諸侯たちを支配したのである¹⁾。

キプチャク汗国の支配層であったモンゴル人は、南ロシアのステップに先住していたテュルク系の遊牧民族であるポロヴェツ人としだいに混淆していった。この混淆の中からテュルク系の言語を話すタタール人が生成してくるが、そのなかにはさまざまな勢力があった。その一つがノガイである。

14世紀の末から15世紀の前半にかけ、白帳汗国²⁾のエミールであったエディゲイとその息子のヌラディンによって事実上の独立勢力であるノガイ・オルダ³⁾が形成された。その部衆がノガイ・タタール人であり、彼らは、キプチャク汗国の滅亡後もマイーク河からヴォルガ河にかけてのカスピ海北岸のステップにおいて遊牧生活を営みつづけた。

タタールの諸勢力のうちでノガイの特色の一つは、始祖のエディゲイがチンギス・ハンの血統者でなかった点にあり、このためエディゲイの子孫であるノガイの首長たちは汗となることはできなかった。クリミア汗国やカザン汗国のように汗を君主としていただくタタール人勢力とはことなり、ノガイにあってはベイが支配者となっており⁴⁾、そのもとに独立性の強いムルザたちが自身の部衆を従えるという社会構造になっていた。

ヴォルガ河の東方で遊牧していたノガイ・タタール人は、キプチャク汗国の解体後に分立した大オルダ、クリミア汗国、カザン汗国などの他のタタール人勢力と比べると地理的にロシアから隔たった存在であった。その分疎遠であったノガイとロシア国家の関係が本格的なものになるのは1480年代の末からのことで、1489年にはノガイのムルザであったムーサとヤムグルチの兄弟（エディゲイの孫）からの使者がモスクワにやってきた⁵⁾。さらに1490年にはムーサからのあらたな使者が到来し、彼の時代よりノガイとロシアとの恒常的な友好関係がはじまった⁶⁾。

ノガイとロシアの関係で重要なポイントとなったのが、両者の間に介在したヴォルガ河流域の情勢、とりわけノガイとロシアの往来の中継地たるカザン汗国を取り巻く状況であった。16世紀になると、カザン汗国の汗位継承問題をめぐり、ロシアとクリミア汗国が激しい抗争をくりひろげるようになった。ロシアは自身のかいらいであるタタール人の皇子を、クリミア側はギレイ汗家の一員を、それぞれカザンの汗位にすえようとして相争ったのである。

ロシアとクリミアが激しく争った16世紀の前半に、ノガイを支配したのは、1502年に死亡したムーサの弟や息子たちである。この時代、ノガイはおおむねロシアを支持する側にまわり、その軍事行動によってロシアを窮地から救い出

すことすらあった。1521年クリミアのムハメッド＝ギレイ汗は、弟のカザン汗サギブ＝ギレイと呼応しつつ、10万のタタール軍を率いてモスクワの近郊にせまり、二週間にわたってロシアの中央部を劫掠してまわった。これによってクリミアが一時ロシアを圧倒して黒海北岸からヴォルガ河流域にかけての地域におけるヘゲモニーを握りかけたのに対し、ノガイは1523年にムハメッド＝ギレイ汗を急襲して死亡させた。勢いをもってクリミア半島に攻め込んだノガイは、クリミア汗国内を劫掠してまわりクリミア・タタールに大きなダメージをおわせたのである。

ノガイの支配者たちのあいだでも、1521年から40年にかけてベイであったサイド＝アフメッドは、ロシアとの友好路線を体現する存在であった。「モスクワの公たちが大同主義的な政策をとったそのとき、勢力の絶頂にあった（ノガイ）オルダは、みずから進んでサテライトの役割を演じた⁷⁾」とはタイムソフの言葉である⁸⁾。

とはいえ、ノガイの歴代の支配者が皆が皆ロシアに組みしていたわけではない。たとえば、ムーサの息子の一人で1548年以降ベイの位にあったユースフである。彼の娘のシュユンピケは、ロシアに推されてカザン汗の位に就いたジャン＝アリに嫁いだが、その後クリミアのギレイ汗家出身のサファ＝ギレイがジャン＝アリにかわってカザン汗になると、その妻となる。ユースフは、かくして自分の娘婿となったサファ＝ギレイを支援し、カザンの汗位をめぐる争いでクリミアの側に立とうとする動きを見せたのである⁹⁾。

このユースフに対抗して親ロシアの立場をとったのが、弟のイスマイルである。ロシアが1552年にカザン汗国を、ついで1554年にはアストラハン汗国をあいっいで征服してヴォルガ水系を掌握していくなか、ロシアと結んだイスマイルは1555年初めにユースフを斃してノガイのあらたな支配者となった。ベイの地位に就いたイスマイルは1554年と1557年の2度にわたってロシアのツァーリ、イヴァン4世と誓約を結び、ロシアの君主の敵をおのが敵、その友をおのが友とすると誓ったのである。

イスマイルとユースフの兄弟間の争いは、また、ノガイのあいだに深刻な分

裂をもたらした。ユースフを斃したイスマイルに反発し、彼の支配から離れて独自の集団を形成しようとする者たちが出てきたのである。そのなかでも重要なのは、ムルザのカーズィに率いられてアゾフ方面に移住した一団である。小ノガイと呼ばれるこの集団は、また創設者の名前からカーズィ・ウルス、カーズィ・タタール人ともいわれた。

小ノガイは、ユースフの子や孫たちとその部衆をも吸収して勢力を拡大しつつ、オスマン朝のスルタンを宗主としてあおぎ、クリミアのタタール人と緊密に連携するようになった。ここから小ノガイとドン・カザークが争うような事態が生じてくる。アゾフ海へと注ぐドン河の流域に住みなしたドン・カザークは、ドン河河口部にトルコが設けたアゾフ要塞を敵視し、機を見てはこれを占領しようとした。その最初の試みが1593年に起こる。要塞を包囲したドン・カザークはこれに突入、占拠しようとしたが、小ノガイことカーズィのタタール人がアゾフ救援に駆けつけたため、要塞の奪取に失敗、撤退をよぎなくされたのである¹⁰⁾。

アゾフ方面に去った小ノガイに対し、ヴォルガ河の東方に残り、イスマイルとその子孫を支配者として戴くようになったノガイの集団を大ノガイという。ここではイスマイルが死亡した後、息子のヂン＝アフメドが1563-78年にかけてベイとなるが、彼の時代にヤイク地方にあらわれノガイと衝突するようになったのがヤイク・カザークである。

ノガイをはじめとする遊牧民がステップの民であったのに対し、カザークは河の民であった。カザークの諸集団は、伝統的に大河のほとりに住みつき、その河に由来する名をもって呼ばれた。ヤイク・カザークもまた、その例外ではない。ヤイク・カザーク、すなわちヤイク河流域に住むカザークのいいである¹¹⁾。彼らがヤイク河流域にやってきた背景にもロシア国家によるヴォルガ河水系の掌握があった。

ロシア国家の支配下に入ったヴォルガ河の流域には、1550年代の末ごろよりドン・カザークをはじめとするアウトローや流浪者が集まりだしてヴォルガ・カザークと呼ばれるようになった。彼らはヴォルガ河一帯に跳梁して盗賊行為

にはげんだが、このためイヴァン4世の怒りをおかして討伐されてしまう。この時、ヴォルガ流域を追われたカザークの一部は、カスピ海をわたって東方へ逃れヤイク河のほとりにたどりついた。これが、ヤイク・カザークの祖である¹²⁾、という。

1573年（ないし1577年）、ヤイク・カザークはヤイク河下流にあったノガイ・タタール人の首邑サライチクを襲撃し、住民を殺しまわったばかりか墓を打ちこぼし死者の骨を辱めるなど狼藉の限りをつくした¹³⁾。かくして大ノガイに対しむき出しの暴力をふるう侵入者としてヤイク地方に登場したカザークは、ヤイク河の中流に城市ヤイツキー・ゴロドクをかまえて、この地に住みつくようになった。

自分たちのもとへ侵入してきたカザークに対する怒りに燃える大ノガイのタタール人は、彼らに激しい攻撃をくわえた。これを前にしてヤイク・カザークは、強力な後ろ盾を求めざるをえず、ロシアの君主に対し庇護を願った。受け入れられた彼らは、1591年にダゲスタン遠征への参加を命ぜられたのを嚙矢としてツァーリの命にしたがって軍務をはたすようになる¹⁴⁾。

時は16世紀の後半。いまだ僻遠のヤイク地方への進出などは考えるべくもなかったロシア国家が、この時期にヤイク・カザークを受け入れたのは、一つには、いまだ向背がさだかではない大ノガイのタタール人を牽制するためであった。イスマイルの時代にロシアに服属したものの、それをもって大ノガイが完全にロシアの君主の支配下に入ったというには、ほど遠い状態であった。ノヴォセリスキーいわく、「大ノガイ・オルダのモスクワへの服属は、完全なものでも堅固なものでもなかった。大ノガイの側からかつての独立を取り戻そうとする試みが生じてくる可能性はまだまだ十分にあった」¹⁵⁾のである。

1550年代半ばにロシアと誓約を結んだイスマイルその人は、敵対するユースフの息子などとの戦いに明け暮れていた故もあり、1563年に死亡するまでロシアに忠実であった。これに対し、イスマイルのあとを継いだ息子たちは、ノガイのかつての独立性を回復しようとした。このため、1573-85年かけノガイとモスクワとの関係は大いに緊張し、大ノガイはロシアとあくなき闘いをつ

づけたのである¹⁶⁾。

大ノガイとロシアが対立するなかでノガイを苦しめたのが、カザークである。ゼン＝アフメドのあとを継いだ弟のウルスは1585年初めに、カザークの襲撃によってオルダが苦境に置かれているとクリミア汗のイスラム＝ギレイに訴え、大ノガイがかつてのようにトルコのスルタンに臣従する気があるとスルタンに伝えてくれるよう願ったのである¹⁷⁾。さらにウルスは1586年にはヤイクからカザークを駆逐しようとしたが、思いもよらぬ敗北を喫してしまう¹⁸⁾。

その後もノガイ・タートルは、宿敵たるヤイク・カザークに対する攻撃をやめず、ついには1613年にカザークの首邑たるヤイツキー・ゴロドークを破壊した¹⁹⁾。この結果、ヤイク・カザークは場所を変えてあらたに同名の首邑を建設することをよぎなくされたのである²⁰⁾。

2 カルムイク人の西進

16世紀の半ばのイスマイルの時代にツアーリに服属したとはいうものの、それ以降も機を見ては独立の回復をはかった大ノガイのタートル人と対処するにあたって、ロシア国家がもっとも警戒しかつ恐れたのは、大ノガイと小ノガイの連携であった。

大ノガイと小ノガイのタートル人は、ときに敵対して激しく争った。とりわけ1588年から1590年にかけての大ノガイと小ノガイの抗争は激烈をきわめ、それぞれのベイであったウルスとヤクシサトが戦いに斃れるというありさまであった²¹⁾。しかし、その一方で同族の紐帯で結びついていた両ノガイが和解して手を組むのもまれではなかった。この両者が合流してロシアを攻撃するのはロシアにとってはタートル人の危険度が倍増するのを意味した。ましてや両ノガイが合同したうえでクリミア汗の支配下にはいってロシア遠征の一翼を担うとなれば、ロシアにとり最悪のシナリオといえよう。

南方から襲い来たるタートル人の襲撃が、とりわけ恐るべき災厄となってロシアの人々のうえにふりかかってきたのは、17世紀の初頭にロシアの支配秩序が崩壊した動乱の時期であった。混乱の極みに達してタートル人の襲撃に対し

有効な防備をほどこすすべを失ったロシアに対して、タタール勢は毎年のように略奪遠征を繰り返し、多数のロシア人を奴隷として捕らえ去った。

動乱を終結に導くべく1613年に成立したロマノフ朝の初期の為政者たちは、タタール人の襲撃を防ぐのを喫緊の課題として、南方の状況の安定化にとりくんだ。その際、ロシア政府はタタール人勢力の中心であったクリミア汗国との和平を回復するのに尽力する一方で、タタール人勢力の分断に意を用いた。そのためにとられた具体的な方策が、ヴォルガ河を境界とするタタール人勢力の地理的隔離にほかならない。

ヴォルガ河の東岸のヴォルガ＝ヤイク河間のステップに帰った大ノガイを、その地にとどめおくことによってヴォルガ河以西のドン＝ヴォルガ河間に住む小ノガイと隔離しながら統制し、ひいてはドン河以西のクリミア汗国のタタール人からも遠ざけておく。これによってタタール人の諸勢力が連合してロシアに遠征するのを防ごうとしたのである。この策は功を奏し、ロシア国家は1618年から30年かけタタール勢の攻勢を鎮静化させるのに成功する²²⁾。

ロシア国家が腐心したこのタタール勢力の分断策は、しかしながら、あらたな遊牧勢力の登場によって危殆に瀕せしめられることとなる。すなわちカルムイク人の西進である。

17世紀にカスピ海北岸に移住してきたカルムイク人は、モンゴル系の遊牧民である。「カルムイク」なる名前は、実は彼ら自身の呼称ではなくテュルク系のイスラム教徒が彼らをさして呼んだ言い方であって、自らはオイラトと称した。ロシア史に登場するカルムイク人は、伝統的に四部に分かれていたオイラトのなかのトルグート部を主力とし、これにデルベト部などがくわわった集団からなっていた。

16世紀の末より西方への移動を開始したカルムイク人は、17世紀初めにはエムバ河、ついでヤイク河の河畔に進出した。さらに彼らは1630年代にはいると大挙してヤイク河の西岸にわたって大ノガイを襲撃するようになり、1635年までにはヴォルガ＝ヤイク河間のステップの支配者となった²³⁾。

新勢力カルムイク人の到来によって、カスピ海北岸の情勢は大きく変わった。

カルムイク人西進の影響は、この地の住民はもちろん、ロシア国家の対タタール人政策にもおよんだのである。

カルムイク人の攻撃にさらされた大ノガイのタタール人は、西方へのがれざるをえず、1634年初めよりヴォルガ河の西岸へと移動し、小ノガイと合流するようになった。ロシアが固執してきた大ノガイ、小ノガイの分断策の破綻である。これに対し、ロシア政府は、ヴォルガ河を境とするタタール人勢力の分断の再建をめざして、大ノガイをヴォルガ河の東岸へ帰還させるべく彼らに対する働きかけをつづけた。しかし、結局これもむなしく、カルムイク人を恐れる大ノガイの大半はヴォルガ＝ヤイク河間のステップにもどろうとせず、ヴォルガ河口のアストラハンからカフカース東部のテレク河にかけてのステップに居住するようになる²⁴⁾。

かくして、従来とられてきたタタール人勢力の分断策が機能しなくなったのをうけて、ロシア国家は1650年代半ばになると東方での政策を転換し、あらたな対遊牧民策を打ち出す。カルムイク人のヴォルガ＝ヤイク河間のステップへの進出を容認し、そのかわりに彼らを軍事的な同盟者として利用するようになったのである。

1655年から1661年にかけてカルムイク人の支配者はロシアのツァーリと一連の誓約を交わし、両者のあいだに同盟が結ばれるにいたった²⁵⁾。これによってヴォルガ＝ヤイク河間のステップおよびヴォルガ河西岸、さらにドン河畔における遊牧を認められるようになったカルムイク人は、その代償としてツァーリの求めに応じて戦場におもむくこととなった²⁶⁾。

ロシアがカルムイク人を同盟者として選んだのは、なぜか。すでに既成事実としてヴォルガ河＝ヤイク河間のステップがカルムイク人のものとなっていたこと。カルムイク人が大ノガイを駆逐するだけの強大な軍事力をそなえていたこと。これらにくわえ、タタール人勢力を相手取って戦う際に見せるカルムイク人の仮借のなさがあった。

バトゥの遠征を契機としてモンゴル人がキプチャク草原のポロヴェツ人をしたがえて成立したキプチャク汗国にあっては、ポロヴェツ人に由来するテュル

ク系の言語が一般化したうえに、宗教の面ではイスラム化の進展が見られた。このため、キプチャク汗国が解体した後も、その旧領にあっては、ノガイ、クリミアなどさまざまな勢力が並び立ちながらも基層には共通する言語、宗教があった。これにくわえて血縁による結びつきである。大ノガイの主要部族であったマンギート族の親族は、クリミア汗国内でも有力な地位を占めていた。こうした言語、宗教、血縁の共通性にもとづきノガイとクリミアは、時に対立することはあっても、たやすく妥協、連合する傾向があった。その際、チンギス・ハンの血統者たるクリミアの汗がかつてのジョチ・ウルスの正統継承者としてノガイに号令する立場となるのは自然なりゆきであった。

これに対し、モンゴル系ではありながら遅れて西方にやってきたカルムイク人は、モンゴル語を話すラマ教徒であり、クリミアやノガイのタタール人からすれば、まったくの異邦人、異教徒であった。ロシアにとっては、このカルムイク人の方が、おりにふれてタタール人勢力の大同閉結にはしたノガイに比べ、より頼みがいのある同盟者となったのも当然であった。ロシアが大ノガイをパートナーにした際に望みえた効果が主としてタタール人勢力の分断であったのに対し、カルムイク人にはタタール人の敵手としての縦横の働きが期待できたのである。

以上の推移を一言でまとめるならば、ロシア国家にとりヴォルガ＝ヤイク河間のステップは、大ノガイの隔離場所からロシアの同盟者たるカルムイク人を養う遊牧地へと姿を変えたということになる。こうした変化は、ツァーリ政府とカザークの関係にも影響をおよぼしていく。

大ノガイとクリミアとの隔離策がとられていた時代、ドン・カザークには両者の接触を妨げる隔壁の一つとしての役割が与えられていた。大ノガイがクリミアのタタール人と合体するには、まずヴォルガ河の西岸へと移って小ノガイを合流し、さらにドン河をも渡河してその西方に移らなければならない。ドン・カザークに課せられた使命は、このドン渡河の阻止であった。ロシア国家にとっては、ヴォルガ＝ヤイク河間のステップに大ノガイをとどめおくのが隔離の基本線である。その基本線が破綻してノガイがヴォルガ河の西方に移った

際には、彼らとクリミアとの合流を防ぐ安全弁、最後の砦の役をドン・カザークが担ったのである

とりわけ、大ノガイがカルムイク人の圧力をうけてヴォルガ西岸に移った1630年代前半にはドン・カザークは、タタール人対策の最前線で活躍した。ヴォルガ＝ドンの河間に位置するようになったノガイ勢のうち、ロシアの一貫した敵手であったアゾフ方面の小ノガイに対しては襲撃をくりかえして痛棒を加えた。これに対し、大ノガイを相手にしては、彼らがドン渡河をはかった場合には攻撃してこれを阻みつつ、その一方で説得によってもとの居住地である東方への帰還をうながしたのである²⁷⁾。その間、ドン・カザークはアゾフ方面における脅威の源とみなしたトルコのアゾフ要塞を攻撃、奪取しようとしたが、これに対しては当時の大国たるトルコ＝オスマン朝とことを構えるのを恐れるロシア政府からきびしく自制を求められた²⁸⁾。

その後、ロシア国家がカルムイク人と結んでその軍事力の利用をはかるようになるのにもない、ドン・カザークも、次章で述べるように、みずからもカルムイク人と同盟を結び、彼らと隊伍を組んで各地の戦場で戦うようになる。同じように、ヤイク・カザークもカルムイク人の登場以降は、ステップの遊牧勢力との協調を求められるようになった。かつてはしばしば大ノガイと係争したヤイク・カザークも、ロシアの同盟者たるカルムイク人がヤイク地方の住民になってからは、この地では軍事力の発揮しようがなくなった。そのためカザークは、ロシアのツァーリの命にしたがってヤイクから遠く離れた戦場へとおもむき、スウェーデン、ポーランド、トルコ＝オスマン朝、クリミア汗国などを相手どっての戦いに従事することとなったのである²⁹⁾。

3 カザークと逃亡民

17世紀半ばにカルムイク人とロシアとの同盟が結ばれてからほどなくすると、カルムイク史上傑出した指導者として著名な人物が歴史の舞台に登場してくる。1669年から1724年にかけて半世紀以上にもわたってカルムイク人を率いたアユカである。

長きにわたる治世をつうじて強力な支配体制をきざきあげたアユカのもとで、カルムイク人社会における権力の集権化はおおいに進捗した。しかしながら、その一方で、単一の支配者のもとへの権力の集中は、それに対する反作用を引き起こすことともなった。

タイシャと呼ばれる族長たちがおのおのの族民（ウルス）の支配者であるような伝統的な部族社会の側からすれば、アユカの権力強化は旧来の秩序をゆるがせる脅威にほかならず、すんなりと受容できるものではなかった。このためカルムイク社会内でさまざまなかたちでの葛藤、アユカへの反発が生じてくることとなる。そのなかで、カザークとの関連で重要なのは、カザーク地域への逃亡というかたちでの抵抗である。

領主のもとから逃亡したロシア人農民が逃げ込む先であったカザーク地域は、同時にロシア人以外の諸民族にとっても避難所となっていた。カルムイク人もまた、その流れの一員となりカザーク地域へ逃れた人々のリストにくわったのである。

アユカに反発するカルムイク人の主たる逃亡先となったのは、ドン・カザーク地域であり、1660年代末より反アユカ派の族長が配下のカルムイク人を率いてドンへ逃亡するようになる³⁰⁾。さらに1690年代になるとカルムイク人のなかではトルグート部につぐ有力集団であったデルベト部の部衆が、アユカの支配に反発する族長のもと、あいついでドンへと去った³¹⁾。

カスピ海の北岸で遊牧していたカルムイク人が、逃亡先としてヤイク・カザーク地域ではなく、ドンを目指したのはいかなる理由からであろうか。一つは地理的な原因であり、ヴォルガ＝ヤイク河間のステップを本拠にしていたカルムイク人にとってヤイクは距離的に近すぎ、そのぶん追求の手を受けやすいということがあろう。また、後述するようにヤイク地域を含むカスピ海の北岸よりも、よりクリミアに近いドンへの逃亡をロシア政府がうながしたという背景もあった。

さらに、逃亡カルムイク人がドン・カザークを頼ったもう一つの理由としては、心理的な要因があげられよう。すなわち、カルムイク人とドン・カザーク

が、しばしば戦場におけるパートナーとして肩を並べて戦ってきたという事情である。

ドン・カザークとカルムイク人のあいだでは、つとに1640年代よりクリミア汗国やトルコ＝オスマン朝との戦いにおいて共闘を目指そうとする動きがあった³²⁾。この動きは、カルムイク人の軍事的な利用をはかろうとするロシア政府の政策を追い風にして実を結び、1661年、ドン・カザークとカルムイク人は、互いに使者を交わして同盟を結んだのである³³⁾。それ以降、両者は連合してクリミア、ノガイ、トルコ、ポーランドなどと干戈を交えるようになった。こうした共闘をつうじてドン・カザークとのあいだに親和的な関係を育てていたカルムイク人が、逃亡にあたってドン・カザークを頼りとしたのは、自然な成り行きであった。

カルムイク人の避難所としてカザーク地域を見た場合、ここは逃亡した反アユカ派の受け入れ先としての機能をはたしたばかりでなく、アユカ自身が難を逃れる場所となることすらあった。1701年にアユカの長男のチャクドルジャブが父と対立してこれを打ち負かした際、アユカはヤイク・カザークに保護を求めたのである。これに応じたカザークはアユカをヤイツキー・ゴロドークにとめない、その近郊に遊牧用の土地をあてがった。結局、アユカは翌年には息子と和解して支配者の座に復帰するが、それまでの一時期、300家族ほどのカルムイク人とともにヤイク・カザークの保護下にあったのである³⁴⁾。

支配的な勢力に対する反抗の一形態としての逃亡という観点から見ると、ロシア国家とカザーク、ロシア国家と遊牧民のそれぞれの関係には興味深いものがある。

ロシア国家の支配力がいまだ十分にはおよんでいなかった時期の南部辺境に成立したカザーク軍団³⁵⁾は、ロシアのツァーリの宗主権を認めつつも、半独立の国家としての地位をもっていた。たとえばロシア・カザークを代表する存在であったドン・カザークである。彼らは1618年より毎年ツァーリから俸禄を受けようになっており³⁶⁾、その点ではツァーリに対して軍役をはたす勤務者たるの相貌をおびていた。その一方で、ドン・カザークは1623年以来、ロシア

国家の外交を担当する役所である使節庁の管轄に入った³⁷⁾ことからうかがえるように一種の外国としてのあつかいを受けていたのである。

このようなカザークの特異な地位、ロシア社会における異分子としての立場は、カザーク地域をロシアの中央部とは異なる特別な場所とした。その典型的なあらわれとして逃亡農民の避難所としてのカザーク地域の機能をあげうるであろう。

ロシアにおける農奴制の生成・強化にともない領主のもとから逃亡するようになった農民を中核として形成されたカザーク社会は、農奴制ロシアにおける特異な例外を構成した。ロシアの中央部において農民が移動の自由を奪われ、領主の土地に緊縛されるようになっていくなか、ドンをはじめとするカザーク地域のみは、農民がここに逃げ込めば、領主のもとに連れ戻されることのない場所となったのである³⁸⁾。この逃亡者の受け入れ権を定式化したのが、有名な「ドンからは引き渡さず」あるいは「河からは引き渡さず」³⁹⁾という言葉であった。

しかし、農奴制に基盤をおくロシア国家にとって、こうしたカザーク地域のありようは、とうてい容認できるものではなく、カザークに対する統制を強化し逃亡者の受け入れを禁じようとする政策がとられた。そうした施策がいちはやく進行したのが、ロシアの諸カザークのなかで他とくらべて中央政府との関係が強かったドン・カザークのもとにおいてである。

ロシア政府は17世紀中葉よりドン河の下流域に住む上層カザークを懐柔しつつドン・カザーク軍団への支配を強めていった。これによって伝統的なカザークの自由、カザーク軍団の自治がしだいに形骸化していくなか、これに対する下層カザークの不満が爆発したのが1670年から翌年にかけてのステンカ・ラージンの反乱である。

この反乱が政府軍ならびに政府に協力するドン・カザークの上層部によって鎮圧されラージンが政府の手に引き渡され処刑された後は、ドンのモスクワへの従属は決定的なものとなる。反乱鎮圧直後の1671年8月にドン・カザークは軍団の歴史上はじめてツァーリへの忠勤にはげむ旨の宣誓をおこなう⁴⁰⁾。さら

に1673年3月のアレクセイ帝の勅命によって、部隊から脱走してきた兵士や貴族＝領主のもとから逃亡してきた農奴のドンへの受け入れが禁止された⁴¹⁾。カザークは必ずしもこの受け入れ禁止令に全面的に従いはしなかったものの、1680年代に入ると、逃亡者を匿うのは、違法な、処罰されるべき行為とみなされるようになる⁴²⁾。

かくして17世紀の後半にドンは逃亡農民の避難所でなくなっていくが、その一方で、この時期にドンは逃亡カルムイク人に対しては門戸を開き、彼らの受け入れ先となっていたのである。こうした事態へのロシア政府の対応は注目に値する。カルムイク人が騎馬兵力としてロシア軍と共闘するようになって以来、ロシアは彼らの軍事的価値を高く評価し、カザークに対しカルムイク人を攻撃するのをかたく禁ずるようになった⁴³⁾。だが、その一方で、カルムイク人のカザーク地域への逃亡にかんしては、アユカをはじめとするカルムイク人支配層の不満にもかかわらず容認したのである。

それどころか、ロシア政府はドンへと向かうカルムイク人の動きを推奨さえした。この点、アユカが自主独立的な態度をとるのを牽制するため、ロシア政府がカルムイク人内の対立を利用したと指摘するのが、バトマーエフである。反アユカ派のドン・カザークのもとへの逃亡の推奨は、彼らを追捕・処罰しようとするアユカからの後難を恐れる逃亡カルムイク人たちがロシアの保護を頼るのを利用して彼らを恭順させつつ、ヴォルガ＝ヤイク河間のステップに比べて地理的にクリミアに近いドン・カザークの地からクリミア、トルコを相手取っての戦いに動員しようとしたのである⁴⁴⁾、と。

実際、強力な騎馬兵力たるカルムイク人を配下に従えるアユカは、ロシアに対し多大の貢献をなす一方で、周辺の諸勢力を相手に独自の外交路線を模索する動きもみせた。常にツァーリへの忠勤に励む同盟者というわけではなかったアユカが離反した場合にそなえ、確実にロシアへの忠節が期待できる逃亡カルムイク人をドンの地においておくことは、一種の保険として重要な意味をもっていたのである。

支配者に不満をいだく遊牧勢力の離脱・逃亡という面からすると、カルムイ

ク人はノガイ・タタール人と明瞭なコントラストを示している。先にみたように、16世紀半ばに親ロシア派のイスマイルがノガイのベイになって以来、イスマイルの支配に不満をいだく者たちは、アゾフに逃れ、ここで小ノガイを形成した。この小ノガイがオスマン朝のスルタンの宗主下に入り、クリミアの汗との結びつきを強めたため、ヴォルガ＝ヤイク河間のステップに残った大ノガイも、時に応じて小ノガイとの合流し、さらにクリミア汗国のタタール人とも連合してロシアを襲うという事態が生じた。このようにノガイの場合、非主流勢力の離反は、かつてのジョチ＝ウルスのメンバーであったタタール人の諸勢力による反ロシア連合の形成というロシアにとり大いに凶となる結果を生み出した。

これに対し、同じ遊牧民であっても、ジョチ＝ウルスの外から宗教も言語も異なる異邦人としてやってきたカルムイク人の場合、逃亡した彼らを受け入れてくれる先としてまず頼るべきは、戦場のパートナーであったカザークであった。同時に彼らのカザークのもとへの逃亡は、ロシア政府にとり歓迎すべきものとなった。カルムイク人のドンへの逃亡は、彼らをクリミアやトルコに対する戦いに動員するうえで、好都合な結果をもたらしたのである⁴⁵⁾。

かつては、ロシア人農民にとっても、遊牧諸勢力にとっても逃亡者の避難先であったカザーク地域は、17世紀の後半にいたり、逃亡者の出自によって大きくその姿を変えることとなった。この時期のドン・カザーク地域は、ロシアから逃亡してきた農民に対しては門戸を閉ざす一方で、遊牧勢力カルムイク人については、おのが仲間として迎え入れたのである。

おわりに

15世紀の後半にキプチャク汗国が解体していくなか、ロシアの歴史は大きな転機を迎える。長らく「タタールのくびき」のもとにおかれていたロシアは、キプチャク汗とその後継者の隷下からののがれつつ、それと平行して、かねてより進んでいたモスクワを中心とする統一国家の形成の過程が一層の進捗をみたのである。

こうしたなかでモスクワがとった方策は、キプチャク汗国を継承したタタール人諸勢力とさまざまなかたちでの連携をはかるというものであった。その具体例としては、チングス・ハンの血統者であるタタール人皇子カシムを迎え入れての従属国家カシム汗国の設立、キプチャク汗の後継を標榜する大オルダの汗に対抗するためのクリミア汗国との同盟、カザン汗国への汗位への傀儡の汗の擁立などがあげられよう。これらの方策は、ロシア自身はその政治システムの一部としてとりこまれていたキプチャク汗国が解体し、後継勢力によってあらたな秩序が再編成されていくなかで、ロシアが自分にとって有利な勢力の均衡を作り出そうとしたものであった。

15世紀の後半から16世紀前半にかけてロシアがとったこれらの政策が主として進行したのがヴォルガ河から東方の黒海北岸にかけてであり、それは16世紀なかばのヴォルガ河水系のカザン、アストラハン両汗国の併合をもって一段落する。

これにかわり、16世紀後半以降、遊牧諸勢力とのあらたな関係の構築が課題として浮上してきたのが、カスピ海北岸のステップにおいてである。この地域では、ロシアは地理的懸隔からそれまで比較的疎遠であったノガイとの関係を樹立しつつ辺境で重要性を増しつつあったカザークも含めて、あらたな勢力バランスを築いていった。さらにここは、古来東方から到来する遊牧民の移動路にもあたっていたため、新参のカルムイク人を迎えてカザークと遊牧民とのあらたな関係が結ばれることとなる。

ヴォルガ河＝ヤイク河の間のステップが、大ノガイの隔離場所からロシアの同盟者たるカルムイク人を養うための遊牧地へと変化していくなか、ヤイク・カザークやドン・カザークと遊牧民の関係もあらたなものへと変わっていく。そのなかで社会的避難所、逃亡者の受け入れ先としてのカザーク地域は、ロシアからの逃亡農民、遊牧民を相手にそれぞれ別の姿を見せるようになっていったのである。

注

- 1) モンゴルのロシア支配については、栗生沢猛夫『タタールのくびき ロシア史におけるモンゴル支配の研究』（東京大学出版会、2007年）参照。
- 2) 白帳汗国は、チンギス・ハンの長子ジョチの長子であったオルダを始祖とする遊牧国家であり、オルダの弟、バトゥが建てたキプチャク汗国（金帳汗国）がジョチ・ウルスのあらたな中核となつてからは、その東方部分（左翼）を構成した。
- 3) オルダは、もともとモンゴル系やテュルク系の遊牧国家の君主・首長の天幕、宮廷の意であり、ここから遊牧集団の政府、領民、領地もさすようになった。汗を載く遊牧国家もこの意味のオルダであるが、通常は汗国といわれる。これに対し、汗なき遊牧集団であるノガイの場合は、もっぱらノガイ・オルダと称される。
- 4) ノガイのベイはロシアでは公 князь に擬せられた。これに対し、キプチャク汗国分裂後の諸汗国の汗たちはツァーリに比された。
- 5) Б.-А.Б. Кочекаев. Ногайско-русские отношения в XV-XVIII вв. Алма-Ата, 1988, с. 65-67.
- 6) Б.-А.Б. Кочекаев. Указ. соч., с.68-69.
- 7) С. У. Таймасов. Ногайская Орда и ее отношения с Россией. (Вопросы истории), 2006, № 1, с. 124.
- 8) これに対し、サイド＝アフメッドと同時期、1533-51年にクリミアの汗であったサギブ＝ギレイは、その治世をつうじてノガイに敵対的で、彼らをカザンやアストラハンから遠ざけた（Б.-А.Б. Кочекаев, Указ. соч., с. 78）。
- 9) 1546年にカザンで勃発した反乱でサファ＝ギレイは追放され、かわつてロシアの推すシャフ＝アリーが汗となった。このときサファ＝ギレイは家族ともども岳父ユースフのもとへ逃れて援助を請うた。これに応じてユースフの長男のユースフがノガイの部隊をカザンに派遣し、サファ＝ギレイを援けて汗位を回復させた（Б.-А.Б. Кочекаев, Указ. соч., с. 75-76）。
- 10) А. А. Новосельский. Борьба Московского государства с татарами в первой половине XVII в. М. - Л., 1948, с.41
- 11) 1775年にヤイク河がウラル河と改称されるにともない、ヤイク・カザークもウラル・カザークとなった。
- 12) А. И. Левшин. Историческое и статистическое обозрение уральских казаков. СПб., 1823, с. 8-10 ; А. Рябинин. Уральское казачье войско. ч.1. СПб., 1866, с. 4-5.
- 13) С. У. Таймасов. Указ. ста., с.126.
- 14) В. Х. Казин. Казачьи войска. СПб., 1912, с. 215.
- 15) А. А. Новосельский. Указ. соч., с.15.
- 16) Б.-А.Б. Кочекаев. Указ. соч., с.110.
- 17) Там же, с.110.
- 18) С. У. Таймасов. Указ. ста., с.126.

ロシア・カザークと遊牧民（中村）

- 19) А. Рябинин. Указ. соч., с. 14.
- 20) В. Х. Казин. Указ. соч., с. 215.
- 21) А. А. Новосельский. Указ. соч., с. 37.
- 22) Там же, с. 98-166.
- 23) ロシア史上のカルムイク人については、拙稿「ロシア国家とカルムイク（17-18世紀）」【ロシア史研究】42号（1986年）参照。
- 24) А. А. Новосельский. Указ. соч., с. 361-62.
- 25) ロシアが1650年代から60年代にかけてカルムイク人と同盟を結ぶにあたり、ロシアの敵手たるクリミアの汗も同時期に数度にわたってカルムイク人のもとへ使者を送り、対ロシア同盟を説いたが（А. А. Новосельский. Указ. соч., с. 104, 117, 133）、結局、このカルムイク人をめぐる外交戦はロシアの勝利に終わることとなった。
- 26) А. А. Новосельский. Указ. соч., с. 110-26.
- 27) Там же, с. 237-39.
- 28) アゾフ要塞の奪取に固執するドン・カザークは、1637年にアゾフを攻めて占領に成功し、その後、アゾフ奪還をはかるトルコの攻撃に耐えながら籠城して要塞を保持し続けた。しかし、カザーク側の消耗もいちじるしく、自力でアゾフを守り続けるのは無理となった。このため、カザークはアゾフをツァーリに献じようとしたが、トルコへの返還を命じられ、1642年に要塞からの退去をよぎなくされた。ドン・カザークのアゾフ籠城戦については、М. Я. Попов. Азовское сидение. М., 1961；Ю. А. Тихонов. Азовское сидение. 《Вопросы истории》. 1970, № 8 参照。
- 29) 1655年リガへの遠征（対スウェーデン）、32-34年スモレンスク戦争（対ポーランド）、77-78年チギリン戦争、96-97年アゾフ遠征（対トルコ）、29, 84, 85年クリミヤ遠征などに従軍した（В. Х. Казин. Указ. соч., с. 225）。
- 30) М. И. Гучинов. Об отношениях калмыков с донскими казаками во второй половине XVII в. 《Вестник Калмыцкого НИИЯЛИ》. 1968, № 3, с. 59-60.
- 31) 1690年にはデルベト部の族長チェルケスが5千名の部衆を率いてドンへと逃れ、彼が帰参した後は、その兄弟のムンコテミルが1万家族以上とともにドンへと去った。これに対し、アユカはムンコテミルを連れもどすべく1699年、1700年と息子たちをドンへ派遣したため、ドン・カザークはムンコテミルを守ってアユカの息子たちと戦った（В. М. Батмаев. Внутренняя обстановка в Калмыцком ханстве в конце XVII в. 《Из истории докапиталистических и капиталистических отношений в Калмыкии》. Элиста, 1977, с. 40-45）。
- 32) М. И. Гучинов. Указ. ста., с. 45.
- 33) Акты, относящиеся к истории Войска Донского, собранные А. А. Липиным, т. I, Новочеркасск, 1891, с. 63, 73.
- 34) В. М. Батмаев. Указ. ста., с. 46-47
- 35) カザークは、周辺の勢力からの自衛のため「軍団」と呼ばれる社会組織を形成し、それ

に依拠して自治を行った。

36) В. Х. Казин. Указ. соч., с. 51.

37) Там же.

38) Донへの逃亡農民の受け入れ権は1640年の勅令により公的に認められるものとなった (И. В. Степанов. Социально-экономическая обстановка на Дону накануне Крестьянской войны под предводительством С. Т. Разина. 《Ученые записки ЛГУ》, № 270. 1959, с. 46)。

39) 大河のほとりに住むのを常としたカザークは、しばしば自分たちの集団および支配領域を「河」と称した。

40) В. Х. Казин. Указ. соч., с. 52.

41) Акты, относящиеся к истории Войска Донского, собранные А. А. Лишним, т. I, с. 83.

42) А. П. Пронштейн. Земля Донская в XVIII в. Ростов-на-Дону, 1961, с. 219.

43) Очерки истории Калмыцкой АССР, т. I, Дооктябрьский период. М., 1967, с. 119.

44) В. М. Батмаев. Указ. ста., с. 38-39.

45) その一方で、カザーク地域は、逃亡カルムイク人の受け入れに起因するカルムイク人のトラブルを抱え込むことになった。カルムイク人とドン・カザークの関係は、すでに1670年代に入ってから緊張をはらみだし、カルムイク人のドンへの攻撃が見られるようになった。この攻撃は、90年代にとりわけ頻発し、かつ破壊的なものとなる (А. П. Пронштейн. Указ. соч., с. 41-42)。